

また 6 月 30 日がやってきた

6 月 30 日は 1 年の折り返し点だ。コロナ禍で時のながれを実感しにくいのが、今年もあと半年である。この日になると、元同僚の石川洋明さんを思い出す。

写真は 2018 年 8 月に刊行された『追悼文集 石川洋明先生』の表紙。この似顔絵は、名古屋市立大で毎年実施している「ようこそ大学へ!施設の子どもたちへの学習支援」で使用したものだ。石川さんの表情がよく出ている。

石川さんは 2014 年 6 月 30 日に亡くなり 7 年の月日が流れた。私が名古屋市立大学を退職した日から 3 ヶ月後のことであった。石川さんは、とりわけ退職前後の私にとって忘れられない。6 月 30 日になると、いつも石川さんを思い出す。こうしてレポートを毎朝書くようになったのも、石川さんが亡くなって 1 ヶ月後からだ。



追悼文集に寄稿した拙文の最後から。

卒業式を終え、いよいよ私の退職の日を迎えた。辞令をもらってから、教職員の皆さんにお礼のメールを出した。すると彼からすぐに返信が届いた。私が退職後はゆっくり仕事をしていきたいと書いたのに対し、「私も、やり残した仕事を進めていこうという立場ですが、スローペースが許されるかどうかは神のみぞ知る、です」。そして「くれぐれもお体にはお気をつけておすごしください(病気は私だけで十分です)」とあった。彼のお通夜と葬儀の席で、このメールのコピーを何度も読み返した。

石川さんについては、追悼文集にも収録されているが、中日新聞 2015 年 2 月 10 日から 14 日まで、「未完の論文 ある社会学者の死」として連載された。石川さんと付き合いのあった安藤明夫編集委員によるもので、大きな反響を呼んだ、連載最後の第 5 回に、私のコメントも掲載されている。「前は自己主張の強い彼に反発を感じていたが、リハビリに励み、奇跡的に職場復帰を果たした彼に感動した」と振り返る。

石川さんの遺稿「私の障害学」にも触れたい。これもレポートに書いたが、彼らしい辛口で「障害をもった経験」を社会学者の目線で綴っている。これを読んで、私の最終講義に彼が車椅子で来てくれて、さっと 201 教室の中ほどまで上がり、講義を聴いていた姿を思い出す。あの時、教室の最前列に人工呼吸器をつけ、普通学級に通う小学 2 年の林京香さんご一家も来てくれていた。退職後も京香さんから、「元気」をもらっている。「遺稿」に書かれていた障害者支援に向けた、社会学者らしい「意向」が参考になる。ここでも石川さんに感謝したい。

(2021 年 6 月 30 日)